

反障害通信

13. 5. 3

42号

「吃音者の社会運動」一言友会（「吃音者」団体）活動の四輪駆動的展開？—

わたしの「障害者」としての原点は、「吃音者」としての立場であり、そしてかつて「障害者」としての立場の確立を「吃音者」の団体一言友会の中で活動することからはじめようとなりました。ところが、そもそも言友会は「吃音者は障害者であるかどうかあいまいである」というところで、「障害者」団体として出発することにおいて躓いていました。そして「障害者」であるという考えに反対するひとがいるから、「障害者」団体として突き出せない」というような意見を、かなり強引に自分の意見を会に押しつけていたひとが語っていました。で、そもそもそこで議論さえきちんとしていなかったのです。かつ、団体として結論が出せないとしても、では、個人としてどう思うかということさえ曖昧にしていたのです。ところで、「言語障害」の規定において、医学モデル的规定において「吃音」を外すひとはいません。明確に「障害」として規定されています。WHO（国連の機関、「世界保健機構」）の障害規定においても、「吃音」の事例がちゃんと出てきます。ただ、日本の法律においては、「障害者福祉」の対象者として「吃音者」は外されています。このあたりはそもそも非論理性に支配されていて、同時に当事者団体が運動的に「障害者」団体としての認定を要求してこなかった故だとわたしは理解しています。要するに、福祉ということは何らかの不利益があるから（これは結局差別ということなのですが）、それを少しでも解消しようというところで求めていくことなのですが、「吃音者」はそれを「吃音者の個人的問題」としてとらえ、個人の努力で解決していこうという枠組みから脱しえないでいます。

まずは、「吃音は治る」というところへのとらわれがありました。言友会の出発は「力を合わせて吃音を克服しよう」という意味不明なスローガンと共に始まっています。意味不明というのは、およそ、出では消え出では消える「吃音の克服法」なるものは、個人的努力によるもので、「力を合わせて」ということは、慰め合うとか励まし合うという枠を脱することはなかったからです。そこでの共同性は、「吃音をもっている」ということでの共同性で、「吃音がもしなくなるとしたら」消えてしまう、いわば「抜け駆けの共同性」といえることで、わたしは「抜け駆けの共同性は共同性たりえるのか」という思いをもっていました。

で、言友会結成から10年目に「治す努力の否定」という内容を孕んで「吃音者宣言」が全言連（全国言友会連絡協議会：言友会の全国レベルの団体）から出されます。これは議論をきちんと積み重ねてだされたものでなく、草案を持ち込んで全国大会の場で急遽議論し、異論を押しさえ込んで決定された、読み返せば読み返すほど、疑問が出てくる文です。

要するに、「これまで吃音者は治すということにとらわれ努力を積み重ねてきたけど、吃

音の有効な治療法は見いだせなかった。一方で、吃音を持ちながらも、明るく前向きに生きている、社会で活躍している吃音者はいる。だから、吃音をもったまま生きる道に踏み出していこう」ということになるのだと思います。

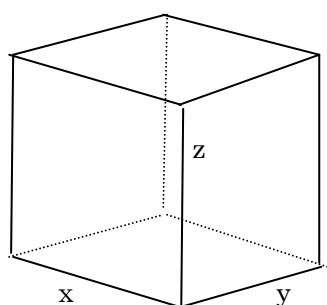
これは、「これまで治す努力に向けていた力を、気持ちの持ち方を変える努力に換えて、社会適応していこう、吃音者は社会適応し得るのだ」という論理になっているようです。

ところが、「気持ちの持ち方を変えることによって、社会適応し得る」というのは、一部の「吃音者」に言えることで（そこでも葛藤のようなことが消えているわけではありません）、総体的相対的には「吃音者」への差別がなくなっているわけではありません。ただ、「吃音者」が受ける差別は排除型よりも抑圧型の差別が大きいという差別の形のバリエーションの違いの問題あるのです。

さて最近、秋風千恵『軽度障害の社会学:「異化&統合」をめざして』ハーベスト社 2013 という本が出されました。そこで、「軽度障害者」の問題をとりあげているのですが、そこでグラデーションという言葉で描かれている、「軽度障害者」の受ける差別や、そのことの中での「軽度障害者」の差別への対応というようなことが、まさに「吃音者」にもあてはまるのです。

そもそも「軽度-重度」というとらえ方自体が医学モデルから来ているので、「社会モデル」的にいえば、「差別の重い・軽い」というとらえ方なのですが、「吃音者」の場合でも、医学的に「重い・軽い」ということが、そのひとの抱えている問題の大きさには繋がらないという言い方がされてきました。前述した『軽度障害の社会学』という本の中でもまさにそのようなことが書かれています。これはマージナルパーソン研究ということの中で、提出されてきた問題に通じることであり、それらのことを踏まえて、差別形態論としてわたしの本の中で展開したことです。

抱えている一抱えさせられている問題の大きさということは「吃音研究」においては、ジョンソンが「言語空間図」とか「問題の箱」という形で示していたことです。



ジョンソンの「言語空間図」

- x 軸:話しことばの特徴
- y 軸:聞き手の反応
- z 軸:話し手の反応

要するに「吃音問題の大きさ」は $x \times y \times z$ で示されるということです。

実はこれは「吃音者」のみならず、「障害者」全体とりわけ「軽度障害者」に当てはまることだと思っています。そこで x 軸は、医学モデル的「障害」の軽重、y 軸は周りの反応、z 軸は「障害者」自身の態度となります。

そして言友会の活動は、x 軸のあくまで「吃音を治す」「吃音を軽減する」ということにこだわる活動、y 軸の周りの人たちの意識を換える（啓蒙的）活動、z 軸の自分の意識を変

える活動のどれかの、そして混合した活動として進んできました。

実は「吃音者宣言」が出された以降の「宣言」推進者の活動は、 x 軸は現実には有効な治療法はない、 y 軸を社会を変えることは困難だ(これは後述するように取り違えから来ています)として、 z 軸の活動を軸にしようとしてきたのですが、 x 軸の活動にこだわるひとたちの活動は続いていたし、「ことばの教室」などへの働きかけなどに端的に表れる y 軸の活動も続いていたのです。 z 軸へのあまりにもこだわりは、わたしは「気持ちの持ち方を変える活動」としてとらえていました。それは甚だしきはマインドコントロールとも言えるようなこととして進んだわけで、わたしはこれは「吃音を治すー軽減する」という抑圧から「気持ちの持ち方を変える」という、これも一種の抑圧へ転換しただけだと批判してきました。差別的状況を換えることなくして、どうして気持ちの持ち方だけを変えることができるのかという問題があるのです。

さて、実は言友会にはもうひとつの性格がありました。被差別者の被差別に依拠した集団、癒しとしての空間、アジール、傷をなめあう関係、お友達集団、といわれてきたことです。

そこで、これらのことはどれを選択するかとかして、とりわけ x と z が二者択一的にあったのですが、わたしはこれは四輪駆動的に展開し得ることで、そこでの一定の安定走行はなしえることではないかと思っています。

ところで、今、言友会の中でも今「吃音者の社会運動」という突き出しが出てきています。それは、「障害者の権利条約」や「障害の社会モデル」の議論がやっと「吃音者」にまで届き、言友会も「社会運動」的な取り組みが必要だという意識が出てきていることなのだと思います。ですが、そもそもこれまであった、「吃音者のことを理解して欲しい」というところで働きかけてきたこと（「啓蒙的活動」）、親やことばの教室への働きかけにしめされてきた y 軸の活動とこの「社会運動」はどうちがうのでしょうか？

これは、「 y 軸の活動＝社会を変えることは困難だ」という取り違えの問題からとらえかえしていけば明らかになります。

実は、ジョンソン言語空間図の y 軸への働きかけは、医学モデルの枠内の活動で、そもそも「社会モデル」というのは、社会を変えるという志向での活動、ジョンソン言語空間図でいえば、その空間図を成り立たせているところそのものを問い、そこから変えていく、言語空間図を成り立たせない別の空間を創出していくことなのだと押さえています。

今、「障害の社会モデル」、もっと言えば関係モデル的なところでは、社会構築主義や物象化論的観点が出てきています。それでいえばジョンソンの言語空間図の世界が構築されてきた社会で、それがどういうところで構築されているのか、そして物象化論的にいえば、なぜ「吃音」は異化するのか「障害」が異化するのかというとらえ返しが必要になります。これこそがわたしが『反障害原論－障害問題のパラダイム転換のために－』世界書院 2010 で展開していたことです。

言友会の活動では「今、ここで」とか「現実的に」とかいうことで進んできました。そして『軽度障害の社会学』の本も結局そこで収束しているようです。それでは、結局医学モデルから抜け出せていない、社会構築主義なり物象化論の持つ意味をつかみ切れていな

いのです。それはそれで一定の有効性があり、そこで「言友会の四輪駆動的活動」や『軽度障害の社会学』で示されていた、社会（場－構造）そのものの変革は困難だとした上での、「異化&統合」への地味で着実な道なり」P172の方向性も成り立ち、必要ではあるのですが、それではやはり、自らの存在の否定的なところから抜け出せません。

わたしは「障害の否定性」を否定したいというところから発した、そもそも「障害とは何か」という突き詰めが必要なのだと思っています。

「障害の否定性」は医学モデル的にとらえた「障害」を否定的にとらえることではありません。確かに、そこから入っていく場合もあり、それは「障害個性論」的なところとして現れる場合もあるのですが、そもそも「障害者」が「障害をもっている」こととして現れる構造自体を批判していくこととしてあります。この「もっている」という論理は、「能力を個人がもっている」としてこの（資本主義）社会が労働を軸として労働力の価値というところで、ひとが価値付けられところから来ているのです。そこから、（パラダイム）転換していかないと、「障害者」へのパターナリズムから抜け出せません。場、そのもの、ジョンソンの言語空間図や「障害の否定性」が出てくる場、そのものの変革の道が必要なのだと思っています。確かに、そのことは困難なのですが、このことなしにはパターナリズムから逃れることは困難ということではなく、不可能なのです。これこそが（脱）構築主義、「差別の構造」そのものを問題にしていくことなのではないでしょうか？

(み)

(『反障害原論』への補説的断章(17)としてもカウント)

読書メモ

今回は従来の読書計画から大幅に離れ、前半は、話題になっていた文学的文化的なことを挟み、反原発の本を一冊読んで、後半は刺激的な掘り下げた論攷の本を挟みました。読書計画がメタメタですが、対話ということでは、かなり進め得るのですが、何しろこの読書感想文が、メモ的になっているので、どれだけ読者との対話をなしえるのか、なんとかしなきゃいけません。個別に届ける手紙やメールで対話をそれなりに補足していきたいとも思っています。

たわしの読書メモ・・・ブログ 225

・岡野雄一『ペコロスの母に会いに行く』西日本新聞社 2012

NHKでドラマとドキュメンタリーの両頭仕立てでやっていて番組を見ました。漫画が原作です。すごく気になって買い求めました。「認知症」の母と介助する息子の母との心のふれあいを描いたものです。文も少し挟んでいますが、あったかい感じのする漫画で、一気に読みました。

この著者はビートルズ世代・団塊の世代で、自作の音楽もやっています。漫画とともに、表現手段を持っていて、ほんとに伝えるものをもっているのはうらやましいという思いを、何も持たないわたしは抱きました。作者はもともとミニコミ誌の編集をやっていて、そこ

に漫画を載せていて、その編集の仕事は退職して、漫画家の道を歩み出しています。

ペロコスというのはたまねぎで、頭髮がたまねぎのようにつるつるで、それを母がぺたぺたとたたくのが挨拶という、実にユーモラスな漫画です。(わたしも同じような頭をしています。)

父がなくなってから母の「認知症」が出る、「認知症」の中で亡くなった夫に会える、「認知症」も必ずしも否定的なことではないという、反転をさせてみせています。

会いに行くというのは、ケアマネに「家でみるのは無理ですよ」と薦められて、母をグループホームに預けて、1週間に3回くらい会いに行くからです。そのことで、負い目のようなことも感じていて、自分は介助をやっているとはいえないという言い方もしています。まあ、会いに行くという形の精神的なケアというのも介助なのですが、まあ、身体介助に伴う、時間がなくなる、身体的につらくなるということを除かれているから、精神的なケアでうまくやれるという面があるのかもと思っています。ただ、家から離れ、息子とも離れていることで、母の心情はどうなのか、そのあたりはあまり描かれていません。

母の介助のまっただ中にあるわたしとしては、ほっとする漫画です。

ほんとに漫画はいいですねー

たわしの読書メモ・・ブログ 226

・大今良時「聾の形」(『週刊少年マガジン 2013年 3/6号』講談社)

ろう者の間で話題になっていると情報が流れてきて、急遽買い求めて読んだ読み切りの作品です。

すざましいいじめシーンが出てきます。「すばらしい!」「でも載せていいのか!?!」編集部に激論を巻き起こした、余りにみずみずしい青春!という欄外見出しがついています。わたしへろう者から入ってきた情報も、とまどっているという感じがありました。

いじめのシーンが「聴障者」へこれでもかこれでもかというような差別的なものです。

差別の問題では、日本において反差別の運動を牽引した部落解放運動で「差別をそのまま描いたのでは、差別を誘発することになる」という提起があるのです。この漫画も、読んだひとへいじめを抑制するというのではなく、逆に引き起こす、誘発するのではという危惧の念を抱きました。そのあたりが編集者の欄外見出しに繋がることです。

いじめの構造というようなことが描かれていて、このようにしていじめが起きて、助長されていくのかということが伝わってきます。で、それでも、いじめはやめようとなっていないと感じるのは、むしろいじめが主のテーマになっているのではなく、そのいじめ-差別の中でも、一つの恋-愛のようなことが、湧き・育っていくということが主のテーマになっているからです。一般的にはいじめ-差別の中では憎しみのようなことがでてくるのですが、ここでは主人公の「聴障者」の女子校生にはそれでも愛が・・・といういわばマゾヒスティックな愛があり、そのような「愛の形」もあるのだということがテーマになっているのではとの思いを抱いていました。ちょっと位相がずれてはいるのですが、反差別運動の立場から批判されている、「アンクルトムの物語」に通じる話です。

みずみずしい青春とありますが、みずみずしいのはいじめ、「みずみずしい」というより

も、「おどろおどろしい」で、「けなげな愛」の青春というようなことではと。

で、このような漫画、ろう者へのいじめや差別を誘発するから載せるべきではないとするのか、でも、むしろそんなところで「載せるな」としたら、いじめや差別をむしろとらえられなくなるし、ろう者の存在をないことのようにしていただけなのか、いろんなことを考えつつ、もやもやとした思いを整理できないで居ます。

ろう者サイドから整理した意見を出してもらいたいと願っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 227

・天笠啓祐『この国のミライ図を描こう—原発とグローバリズムが無理なわけ』現代書館 2012

脱原発とバイオテクノロジー批判とグローバリゼーション批判が絡まり合っているというところで書かれた本です。

著者は『技術と人間』の編集に携わったひとで、この本は 3.11 を受けて、現代書館の社長から科学というところに関わってきた観点から書いて欲しいと、直接依頼されて書いた本のようなのです。

すごく簡潔に分かりやすい本です。

目次をみるとだいたいアウトラインが分かります。抜き書きします。

第1章 地域主権・地域循環型社会／第2章 食料主権／第3章 生物多様性／第4章 自然エネルギー／第5章 等身大の技術／第6章 予防原則／第7章 非人間的労働・格差・貧困のない社会／第8章 差別のない社会／第9章 市民によるもう一つの情報ネット／第10章 民主主義

ただ、わたしはそもそも「未来図」を描くには、現実の社会の矛盾の分析から入って行かなくてはならないと思います。それがないと、課題を網羅するだけで、それがどう繋がっているのか分からなくなります。この本は現代科学批判ということから、それが社会の構造に根ざしていることは押さえています。ですが、マルクスが、未来図を描くことをユートピア的なことを描くことではないとして禁欲して、経済学批判としてやろうとしたように、資本主義批判として出発する必要があるのではと思います。それをやらないと、経済成長の論理に飲み込まれていくことがあります。著者も、そのことは押さえているようで、だからこそ「ミライ図を描こう」とカタカナ表記になったのでしょう。社会は変わらないというところで、飯が食えないというところで、目先の現実の利害というところで、飲み込まれていく構図から脱する途を示していく必要があるのだと思っています。アベノミクスの経済成長という幻想を幻想として突き崩していく作業をしないと、危うさは感じていても、飯が食えないというところで、幻想にとりつかれていく、もしくはニヒリズムに陥っていく構図が生まれていくのだと。

・熊谷徹『脱原発を決めたドイツの挑戦 再生可能エネルギー大国への道』角川 SSC 新書
(角川マガジズ)2012

ドイツは福島第一原発の事故後、改めて脱原発にカジを切ったのですが、同時に化石燃料からの脱却もやろうとしています。「再生可能エネルギー大国」へ道をとろうとしています。決してはっきりとした代替エネルギーの展望があったのではなく、むしろ、「ドイツの環境ロマン主義」(P68)と言いうようなところで、「原子力と化石燃料からの脱却をめざすエネルギー革命は、エコロジーという政治的なイデオロギーに基づくものであり、経済的理由によるものではない・・・」(213P) ところで、ふみこんだもので、まさに「挑戦」ということを描き出しています。それなりのドイツ人の論理性において、展望や政策を練っているとしても、かなりの危うさを著者は指摘しています。わたしは「背水の陣」というようなことを感じとっています。それでも、ドイツは踏み込んだ、日本もやれるという提起なのです。

日本は、原発事故の究明もなされるままに、自民党政権に舞い戻り「安全なものから動かす」再稼働の道に踏み込もうとしています。そもそも原発に安全なものはないということが分からないのです。一体事故が起きたらどうなるか、実体験があるにもかかわらず。ねずみ一匹で冷却装置がとまるようなあやうさがあるものがなぜ安全なのか？ そもそも福島原発事故の責任ということがない、責任という概念がない政治に恐ろしさと怒りを禁じ得ません。

・小松美彦『生権力の歴史—脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる—』青土社 2012

この著者はわたしが継続して読み込んでいるひとのひとりです。

「尊厳死」「人間の尊厳と自己決定権を巡る論攷」「脳死・臓器移植」ということで問題点をほりさげ、そしてそれらのことをきちんと詰めて展開しています。

そして、さらにこのことを哲学的にフーコーとアガンベンの生政治—生権力論あたりに絡めて展開し、そしてピコ以来の生倫理にからむ哲学な展開から、生権力ということをとらえ返しています。そして、ギリシャ哲学以来のゾーエー(ただ生きること)とビオス(良く生きること)との議論で、脳死を宣告されたひとが、ただ生きている—ビオス的には死ととらえられるものが、実は関係の中でまわりのものに、大きな影響を与えて(まさに生きて)いるということを現実の脳死を宣告された子どもの例から示しています。哲学的な論攷を現実の問題につなげてみせた見事な論攷です。

この本は『図書新聞』3103号で、香川知晶さんが書評を書いていて、的確な要約をしています(全面的に賛同しているわけではないのですが、本を読む上できわめて大切なパイロットになっています)。また、この本は是非各自実際に読んでもらいたいのので、わたしから要約のようなことは省きます。

で、わたし独自の読みながら思い巡らしたことを書き置きます。

この本のキーワードは「尊厳」ということではないかと思っています。で、その「尊厳」で、わたしはフーコーの微視的権力論は、マクロな法制度的な国家権力論を押さえていな

いという批判があり、わたしもそれに共鳴しているのですが、フーコーの微視的権力論は、ルーティン化されたところでの行動が、権力関係を生み出していくということ、それは優生思想において、労働力の価値を巡るヒエラルヒーが生政治的な権力関係を生み出していく、優生思想を生み出していくというとらえ返しが必要ということに通じていきます。そのあたりのこと、まさに労働力の商品化というところから優生思想が生まれていくという生政治的なところに、貨幣の使用が、そして労働を巡る労賃でのヒエラルヒーが物象化を固定化し、労働力の価値という処での差別を生み出していくという、マルクスの唯物史観的なとらえ方が生きていくのではないかとも思えるのです。だからこそ、このようなところの優生思想の土台としての労働力の価値を巡るヒエラルヒーという唯物史観、「資本主義社会では乗り越え不可能な」というマルクスの思想があるのだと。

アリストテレスの生命観とは反転したピコ(アリストテレスは、生きていること>動物的な生>人間の生と、生きていることをすべての生の基礎においたのに対し、ピコ以来の西洋近代哲学は自己決定する人の生>人の生>動物の生>植物の生とおいていること)と、それ以降の近代的世界観での優生思想とつながる「尊厳」概念をとらえ返しています。

前にも書きましたが、この著者は廣松渉さんと交差していて、註で廣松さんに触れ、「間主体的な、相互主体的な」という言葉も使ったりしています。

ひとの生は、ただの生ということがむしろ関係の中で生きる・働きかける生になるところを展開したきわめて刺激的な本です。うまく紹介しきれません。是非とも読んでみてください。

たわしの読書メモ・・ブログ 230

・秋風千恵『軽度障害の社会学:「異化&統合」をめざして』ハーベスト社 2013

「障害者」の中でも、「軽度障害者」と規定される(もしくは自己規定する)立場はわたしも共有していて、この論攷は興味深いものがあります。そもそも「軽度—重度」という規定自体が医学モデルに基づくものとしかたらえられません。まして、わたしの文を引用してくれている(註 1) のですから、なぜ、「軽度障害」という概念を使い続けるのか分からないのです。実は、この本の中にも出てくるのですが、障害学研究会のメーリングリストの中で「軽度障害者」のメーリングリストを作ろうという提起が出ていました。そのときにきちんと提起しようかどうか迷いつつ、リアクションをとらなかったのですが、わたしはこの問題は「マージナルパーソン(マージナルマン・・・註 2)研究」として出ている心理的マージナリティの問題として押さえています。そのことは秋風さんの文献リストにあげてもらっているわたしの本の中に「差別形態論」として書いています。どうも届いていないようです。

ですが、この本はインタビューを元に論攷を進めていて、その心理とそれがどこから来ているのかの分析はかなり鋭く切り込んだ力作といえます。著者の自らの立場での差別やパターンリズムへの批判ということで生み出された貴重な論攷といえます。自分がインタビューしたひとの心理分析なり、批判的観点を出すということは「障害者」の立場では、かなり困難なのですが、それでも、深めるというところで学的に踏み込んだところでの貴重な資料・論攷と言い得ます。わたしは学者の立場ではないのでそのようなところに踏み

込めないのですが・・・(註3)。

さて、この著者はどうもフェミニスト障害学を僭称するモリスに共鳴しているようです。モリスの批判は「障害の社会モデル」を一定評価しつつ、しかし「個人のインペアメントの経験を無視している」という批判のようなのです。わたしは部分的に引用されるモリスの文に基づいて、繰り返し批判を続けています。英語の文献が読めないという状態のまま、原著にあたれないでいます。是非、秋風さんのようなひとに翻訳をと願っています。

著者は石川准さんにも共鳴していて、石川さんの、モリスは「インペアメントとその体験を(中略)社会モデルの外部にくくりだすのではなく、インペアメントの社会的構築という視点を入れて社会モデルを改訂していけないかという問題提起を行っている」という文を引用しています 21P。モリスも「社会モデル」を全否定しているわけではなく、評価しているところでは社会的構築という観点はあるとは言えるのですが、どう読み込んでみてもむしろ「インペアメント自体が歴然としてある」という論攷になっているのではないのでしょうか？(註4) 著者の文献表の中には上野千鶴子さんの『構築主義とは何か』という本もあります。わたしは構築主義の観点からいえば、「インペアメント自体は歴然としてある」というところにおいて脱構築することだと思うのです。フェミニズムを障害学に冠したところのフェミニズムでいえば、「性差そのものは歴然としてある」ということをポスト構造主義フェミニズムが脱構築したように。ですが、どうも著者はインペアメントとディスアビリティの(シンボリック)相互作用論という立場で論攷を進めているようです。

そこでは、そしてモリスの立場もおそらく、そもそもインペアメント自体も脱構築するという観点がみられません。この観点こそが「インペアメントの社会的構築という視点を入れて社会モデルを改訂していけないかという問題提起」なのだと思います。

著者はインペアメントとディスアビリティを使い分けしているのですが、それならば‘障害’ということばをどちらの意味で使っているのか、はっきり分けることです。もっとも肝心の「軽度障害」という言葉自体がどうも医学モデルのインペアメントにしかなくなっていないのではないのでしょうか？

構築主義になっていない(註5)というのは、『構築主義とは何か』という本の編集をした上野千鶴子さんが脱構築の立場で『脱アイデンティティ』という本を書いているのですが、著者はアイデンティティという構築主義的に取り上げるべき概念を何のためらいもないように使っていることにも現れています。(註6)

さて、インペアメント自体の脱構築がとらえられないことの一つの要因として、著者が「精神障害」や「知的障害」を対象外として「身体障害」だけを取りあげることにしたことがあります。そもそも障害問題を論じるときに、なぜそんな発想がおきるのか分かりません(註7)。そもそも障害とは何かということをとらえ返すとき、総体的にとらえないととらえ損なうからです。そもそも「障害とは何か」というきちんとした規定が著者から出ていないのです。そもそも障害各論自体を医学モデル的にとらえているのです。わたしはわたしの本の中で「社会モデル」的な観点で障害各論がどうなるかの試論を出しましたが(註8)、これも届いていないようです。

もうひとつ、著者は石川さんの図を援用して、そこでサブタイトルになっている「異化&統合」という概念を出しています。この図は、実は「障害学への招待」という連続講座の

中で示されていて、それへこの講座をコーディネートした長瀬さんにわたしがコメントをして送ったことがありました（註 9）。要するに差別そのものの分析概念とそれへリアクションする(運動につながる)概念とをごっちゃにしているのです。それらのことは ICF の障害概念のとらえ返しの中で出てきた図においても現れているのですが、わたしはきちんと整理していく必要を感じています。（註 10）

それからもうひとつ、どうも身体的な異化ということ、違和ということしかも美意識的異化ということ、を軸にたてているようです。わたしは障害各論で美意識的などころも各論の一つとしてとりあげています。でも、わたしはそもそも「軽度」というところは労働能力というところで、どう評価されるのかというところでの「軽度－重度」という規定が軸になっているのではと思うのですが、どうでしょうか？

さて、著者の結論的などころでの方向性の提起ですが、どうも「異化というところを開き直る」という方針の要です。ですが、一体差別社会の差別と遊離した開き直りは総体的に可能なのでしょうか？ 結局差別をなくすのは困難だから、手っ取り早く被差別当事者の意識を変えることによって、「軽度障害者」は一定社会適応可能という論理になっていて（註 11）、「軽度障害者」の受ける差別は決して差別が軽いわけではない」ということも、障害に関する啓蒙という枠に収まってしまいます。（註 12） この本の中で、軽い－重いということをとらえ返そうとしています。最後で出てくる方向性、「異化&統合」というところの方向性は、「重度－軽度」で分けられるということになってしまっているのではないのでしょうか？

排除型の差別をモーメントとして（註 13）より強く受ける「重度障害者」はパターンリズムから抜け出せず、抑圧型の差別のモーメントをより強く受ける「軽度障害者」も啓蒙というところで進めていくところでは「理解して欲しい」というところでのパターンリズムから抜け出せません。

著者はグラデーションという言葉を使っています。わたしとしてはヒエラルヒーとしてそれをとらえ返していますが。障害差別の土台には労働力の価値というところでの差別のヒエラルヒー（グラデーション）の下方に総体的相対的に組み込まれてあるのだと押さえています。問題は障害差別の思想的バックボーンとしてある優生思想がひとを価値づけるところにあり、そのことから問題にしていけないと、結局秋風さんがきちんと取り上げ、批判されているパターンリズムから抜け出せないのではないかと考えています。

註

1 「もう既に 70 年代の後半に、「障害の重い軽いという言い方がされるけど、差別に重い軽いがあるわけではない」という発言が障害者自身から出ていました。」

2 マージナルパーソンという言葉はそのまま通っているのですが、訳される時は「境界人」と訳されることが多いようです。この本の中で出てくる「どっちつかずの」という意味が分かりやすいのですが、わたしは差別形態で抑圧型の差別がとらえられないところで起きている問題で、どっちつかずということではなく、はっきり差別される側としてあり、「境界」ということではなく、むしろそのような心理的マージナリティに陥りやすい立場としてとらえられることです。最初は「マージナルマン」という言葉でした。「マン」と

いうことばの差別性がフェミニズムから指摘される中で「パーソン」になっています。

3 障害学研究会のメーリングリストで、「学者たちはわたしたち障害者を食べ物にしている」という批判がでていました。確かに相手の心理や立場を分析していることは、自分がそんなことをされることを考えたらぞっとするようなことなのですが、むしろそういうところでの分析が必要になっていくことで、そのことを通してトータルに当事者達に返していけることで、当事者研究者はジレンマのようなことを感じつつ、当事者だからやれることと、論的な突き詰めで、対象化することのジレンマのようなことを感じつつ、やりきっていくことかなと思ったりしています。

4 誤解のないように書いておきますが、わたしはインペアメントと名付けられたこと<そのもの>がないという主張をしているのではなく、<そのもの>がなぜインペアメントとして名付けられるようなこととして価値づけられて浮かび上がったのかを問題にしているのです。

5 実をいうと、この構築主義という表現の仕方にわたしは違和を感じ続けています。構築されてあることとして批判的にとらえているのですから、反構築主義なり脱構築主義として突き出す事ではないかと思うのです。

6 アイデンティティの問題はそれだけではありません。「統合失調症」の「アイデンティティの混乱」という事態をとらえるとき、アイデンティティ論が抑圧的に働くことをとらえたとき、わたしはアイデンティティという主張を出していくことを止めました。そもそも、認識論的にアイデンティティ論は実体主義に陥っていくという批判も持っています。

7 「障害者運動」のスローガンー基本的理念に「誰も排除しないー排除させない」ということがあり、そのことにも反するからです。

8 9章

9 今回 <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/ssm.pdf> として HP にアップしました。

10 13章2節に、ICFとなる前の、ICIDH-2批判として出しています。

11 排除型の差別をより多く受けるということで、社会に入って行っているという現実はあるのですが、必ずしも適応できていることはつながりません。抑圧の中で、不適応的な事も出てきています。

12 わたしたちもしんどいのだというつらさ比べのようなことも起きていて、しんどさを理解して欲しいという脈絡の活動も出てきます。問題はそのような啓蒙ではなくて、社会そのものを変える事なのです。

13 モーメントに対する語はエレメントです。この使い分けは、エレメントは実体主義的概念だということから、エレメントということばを避けていることです。

家族介助のジレンマ(1)

わたしは介助の問題を「障害者」への介助問題から考え始めました。「障害者運動」において、自立生活運動は施設から出て地域で生きるということと、親元から離れて地域で生きるということが言われてきました。で、現在的には施設ということも施設自治会というようなところで、とらえ直しができているのですが、一般的に「施設」に対する否定的な思いは継続しているようです。

で、ここではわたしがやっている家族・肉親による介助の問題をここで取り上げます。「障害者」介助の問題と高齢者介助の共通性とその違いの問題を押さえておこうと思います。

それなりに何をどのような介助を求めているのか、肉親の場合はそれだけつきあう時間が長い・長かったわけで、より理解できるというところで、それなりの以上くみ取った介助はなしえるのですが、「障害者」の場合は親の子に対する「支配」の問題が出てきます。高齢者の場合はどうなのか、まず、それまでの親への思いというようなところでの感情的な衝突、それから親が介助される立場になっているのに、その立場が変化しているのに、その気持ちが転換できないという問題があります。親の子離れ、子の親離れというところできていないという問題にも通じることです。これはわたしが母の介助を始めたときに、そこで衝突していたことでした。わたしの場合は兄妹が多く、子どもころ、そんな構われ方をしなかったのに、親が家事をしなくなったところで、母の場合は「何もやることなく」、子どもの世話に生き甲斐を再度見出していくというところで、干渉してることがありました。こちらとしてはとっくに親離れしているのに、そして放任的に育てられてきたのに、子育てが好きではなかったのに、「今更親が干渉してくる」ことがたまらなくいやでした。そこで自分の生き甲斐を見出しているのだというところで「寛容に」なればよかったです。わたしは生き方の問題として、「子どもの世話しか生き甲斐がない」というような母の生き方を反面教師的にとらえていましたから、なおさらでした。それから親の子どもに対する「支配」というようなことも感じ、反差別的にいやでした。もちろんフェミニズム的にとらえれば、そこに性差別の問題があることは理論的には「分かっていた」が、理論と実践の乖離のようなことで、結局分かっていることで、だから何度も衝突していました。これは今は、母が一度「全面的依存状態」になったところで、その上で、生き甲斐、自分の存在感をもとめて子どものことに気を遣う親を「演じている」ところに、やっと「寛容」になれてきました。さきほどから「寛容」という言葉を使っていますが、介助者が被介助者をコントロールしようという意識性がそこにあり、肉親への思いというところで、特に睡眠とか食事とかをコントロールしようという意識にも繋がる「支配的」に働く意識ではないかと、その問題性をとらえ返しています。こういう概念がでてくること自体が、肉親介助の問題性だと思いつつ、あえてそのまま使います。

さて、なぜコントロールしようとするのかですが、これは母が骨折して入院していたときに、完全看護の病院だったのですが、母が「譫妄状態」になり大騒ぎして、家族で付き添うことになりました。で、昼間起こしておくようにと医者から言われ実行していたことに始まり、その延長として続いています。「譫妄がひどくなる」とか、「認知症になる」とか言われていて、それを防ぐこととしてやっていたのですが、それを介助がさらに必要に

なり、自分でベッドにいけなくなった中で、寝る時間も「誘導する」ようになっていきます。実はこれは母のためということもあるのですが、好きなときに寝て好きなときに起きるとなると睡眠が浅くなって、しかも、不安だからこちらを寝かせないで、ナースコールを押し続けるという事態を避けるという意味もあります。これは誰か常時起きていて付き添っていれば、解決できるのです。わたしはそもそも夜型なので、夜の間はわたしが起きていて、昼間にバトンタッチすればいいのです。ですが、現実にはそんな態勢はとてできません。このあたりは肉親への愛情なのか、愛情という名のもとでの抑圧なのか、母がそもそも「自由」とか「譫妄」とか「認知症」とかをどうとらえ、自分がどうしていくのかということなのですが、母は結構自己主張するひとなので、基本「意志に沿う」としつつ、こちらの都合でコントロールのようなこともしてしまっているのではと、考え込んでいます。このあたりは家族介助の問題点で、むしろ他人介助の態勢で当人が周りのひとの意見も参照にしながら、自分で決めていくことなのではないかとは思っています。わたしが今一番抱えているのは、母の介助をしていて自分の時間がなくなる、睡眠不足になるという問題です。勿論、もっと多くの家族で介助の態勢が作ればこのことはそれなりに解決できることです。ですが、わたしの場合、近くに妹が二人もいて、むしろ恵まれている方で、母が骨折して入院したときには、わたしを軸に泊まり込み態勢を作りました。しかし、日常的に妹たちもそれぞれ家族を持ち仕事をもっていて、少なくともわたしはカネを稼ぐ仕事一労働の必要から解放されているので、わたしが家族介助ではほとんど母の介助をし、妹たちはそれを支えるという態勢になっています。で、現実、そこで「母の意志に沿う」ことと、こちらの都合を押し付けるせめぎ合いのようなことになっています。

これは、家族だけで介助をする場合の話です。実際には介護保険制度を使っていて、他人介助を入れています。こちらの方が肝心なのですが、ここには、他人介助を当人がどう受け止めるのかの問題もあります。

長くなったし、この文は思いつくままに書いていて、後で検証してまとめていく作業をしますので、次回にまた書き直し、書き加えて行きます。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 42号」アップ(13/5/3)
- ◆HP「対話を求めて」に「連続講座「障害学への招待」に参加して」アップ
<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/ssm.pdf>
- ◆HP「各障害」の中に「ジョンソンの空間図と言友会の方向性」アップ
<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/zjgk.pdf>
- ◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡先にメールも使って下さい。メールをされない方は携帯090-9857-3431に連絡ください。

時局川柳（8）

安全と言うことばには不信だけ
ねずみ死に止まる技術を輸出する
放射能まき散らしても輸出する
崩壊の技術神話をふりかざす
処理できぬ技術を売り込むおそろしさ
事故起こし技術を誇る恥さらし
美しい誰が言ったかうそつきよ
経済の論理の中に美などなし
ひといのち危険にさらしてかねもうけ
笑おうと思う心が凍りつく
放言も引き継いだかブルータス
敵はだれ己の心の中にあり

（編集後記）

- ◆今号も少し遅れてしまいました。いろいろ用事が重なっているので、隔月をめぐりに不定期刊にします。
- ◆巻頭言は、『軽度障害者の社会学』の本と言友会の「吃音者の社会運動」が交差した論攷です。著者とも意見を交換したいと思っています。
- ◆久しぶりに「吃音関係」一言友会関係の文を書きました。会をはなれて「障害者運動」総体的なところに出ていますが、少しは原点的なところに返していきたいという思いは持ち続けています。届いたためしが無いのですが、・・・。
- ◆読書メモ、かなりはちやめちやになりつつも、今回は刺激的な読書になっています。何とか著者のひとたちへも返し、議論を巻き起こし深化していきたいのですが、やりきれないでいます。
- ◆今、まったく本が読めなくなっています。モリスを誰か翻訳してとないものねだりばかりしても仕方がないので、「後記」冒頭の「不定期刊」が本格化？するかもしれません。
- ◆安倍政権は海外への本格的な原発の売り込みを始めました。事故を起こしておいて、そんなものを海外に売ろうという感性がどうしても理解できません。事故を起こして、その対策をしているから技術が磨かれているという意味不明のことを言っています。どうもわかりません。放射能被害という何十年何万年と続くことをないことのように扱っています。事故を起こすとその被害が甚大なものを作るのがおかしい、まして、まだ事故原因も特定できていないのに、売り込む厚顔さがどうしても理解できません。彼は美しいという言葉が好きなのなのですが、それが「美しい」といえることなのでしょう？
- ◆介助日記は、思いつくままに書きながら、後から修正を加えていくことにします。それ

なりに論考がまとまってから書き始める、というわたしの常套的なことを外して、やってみます。

◆いつも巻末のいれている『反障害原論』への補説的断章、今回は巻頭言と重ねました。わたしが出版本の中で「差別形態論」として展開したものと重なることです。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>